

Newsletter

November 2023 no. 1

CCI 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究 (S)

アフリカ狩猟採集民・農牧民の
コンタクトゾーンにおける子育ての
生態学的未来構築



CCI Grant-in-Aid for Scientific Research (S)



Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa

目次

プロジェクト趣旨

研究代表 高田 明	3
-----------------	---

インタビュー

特集 1 研究代表 高田 明	4
----------------------	---

特集 2 メンバー 山内 太郎	10
-----------------------	----

活動報告

紙芝居プロジェクト	15
-----------------	----

海外派遣報告	16
--------------	----

主な業績	17
------------	----

受賞 / 関連イベント	19
-------------------	----

活動予告	21
------------	----

事務局より / 編集後記	22
--------------------	----



プロジェクト趣旨 Aim of research project

研究代表 高田 明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)

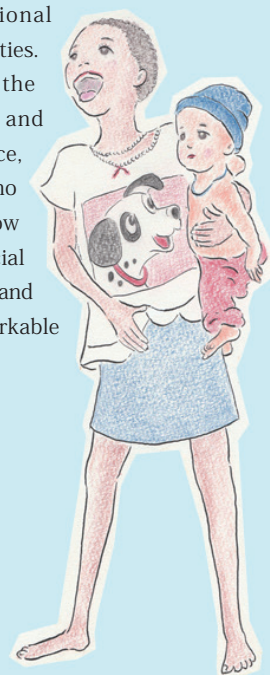
Principal Investigator: TAKADA Akira (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies, Professor)

本研究プロジェクトは、近年よく叫ばれるようになった「子育ての危機」に挑むものです。現代社会の危機の多くは近代が内包していたもので、それらに直面したとき、私たちはしばしば狩猟採集民を振り返ります。そのルーツは、近代の夜明けにまで遡ります。18世紀後半、ルソーは「自然人」、すなわち自然状態の人間として、不平等がほとんど存在せず、小集団で自律的に暮らす人々を思い描きました。20世紀になると、初期の人類学者たちが、こうした自然人を彷彿させる狩猟採集民についての報告を行うようになりました。そうした研究は、現代社会の根幹をなす人間像にも反映されてきました。しかし、その後も研究は大きく進展しており、初期の報告には必ずしもあてはまらない狩猟採集社会の姿が明らかになっています。今や、ルソーの手のひらから抜け出し、生態環境、周囲の諸民族、国家などの社会制度と関連づけながら、狩猟採集社会の文化的多様性の形成過程を解明していくことが不可欠です。

こうした観点から本研究プロジェクトは、我が国が世界に誇る狩猟採集社会の研究実績があるボツワナ、ナミビア、カメルーンでアクション・リサーチを展開し、得られた動画資料の分析に基づいて、狩猟採集社会でのハビトゥス、すなわち文化的な行為や思考を生み出す身体的性向とそれを取りまくマイクロ・ハビタット、つまり身近な行動環境、言語環境、制度環境が相互構築される過程を明らかにします。これにより、理論的には社会変容と社会化を結びつけて理解すること、実践的には、いま社会化しつつある子どものよりよい未来の構築を目指します。これは、人文社会科学を基礎づけ直すとともに近年著しい成長を遂げているアフリカの社会や人々と共に学ぶことを可能にします。

This research project is an assault to the “crisis of child rearing” that has become a popular topic in recent years. Many of the crises of modern society were inherent in the modern era, and when faced with them we often look back to hunter-gatherers. In the late 18th century, J-J. Rousseau envisioned the “natural man,” or man in his natural state, living autonomously in small groups with little inequality. In the 20th century, early anthropologists began reporting on hunter-gatherers reminiscent of these naturalists. Such research has been reflected in the image of human beings that forms the basis of modern society. However, research has made significant progress since then, revealing a picture of hunter-gatherer societies that does not necessarily fit the early reports. Today, it is essential to get out of the palm of Rousseau’s hand and to elucidate the process of formation of cultural diversity in hunter-gatherer societies in relation to the ecological environment, the surrounding various ethnic groups, the state, and other social institutions.

From this perspective, this research project will develop action research in Botswana, Namibia, and Cameroon, where Japan has a world-class record of research on hunter-gatherer societies. Based on the analysis of video materials obtained in each location, we will clarify the process of mutual construction of habitus, or physical dispositions that produce cultural actions and thoughts, and microhabitats, or familiar behavioral, linguistic, and institutional environments in hunter-gatherer societies. In this way, we aim to understand the link between social transformation and socialization in theory, and in practice, to build a better future for children who are now being socialized. This will allow us to re-found the humanities and social sciences and to study with the societies and people of Africa, which has seen remarkable growth in recent years.



インタビュー 特集 1

本プロジェクト『アフリカ狩猟最終民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築』について

研究代表 高田 明

(2023 年7月27 日実施, インタビュアー:野口 朋恵・杉山 由里子)

本プロジェクト『アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築』について

高田 僕自身は、早くから子育ての研究をしてきました。「養育者—子ども間相互行為」として、理論的には相互行為の分析によって、生まれてから5歳くらいまでの子どもと周りの人のかかわりを研究しています。その後、景観研究を始めました。きっかけは調査地のサンの人びとと一緒に生活していた時に、彼らの Way Finding（道探索）がすごいなって思ったこと、そして、子どものインタラクションの観点からも、発達の進行とその文化独自の方向性の関係に関心があり、環境に対するかかわり方とか知識がカギになりそうだなって思ったことです。この2つのテーマに基づく研究を、どちらもやりつつそれが交差するようなかたちで立ち上がってきたテーマっていうのが、本研究課題でもある、生態学的な未来構築です。子どものハビトウス、すなわち子どもの身体的知識みたいなものと、マイクロハビタットっていう環境側の特徴がどのように相互構築されていくか、という関心がこのテーマにつながっています。もう一つのテーマである、農牧民と狩猟採集民のコンタクトゾーンですが、ボツワナでいえば、サン（San）の人びととカラハリ（Khalahari）やツワナ（Tswana）、ナミビアではサンの人たちと農牧民オバンボ（Obambo）。ナミビアの場合、サンの人たちは、このオバンボに囲まれて暮らしています。彼らの間では歴史的に通婚が繰り返されてきたこともあって、ライフヒストリーを聞いていると、狩猟採集民—農牧民の文化的境界を越えているような個人もわりあいたくさんいます。その関係を論じるにあたって、あるグルー

プに対する外部からの影響といった視座ではなくて、お互いに関わりながらそれぞれが自律したグループをつくっていく仕組みがどうなってるのかを考えたい。これも初期から気になっていたテーマです。ですから、子育ての研究と、景観の研究と、エスニシティの研究が交差したようなところに出来上がったテーマが「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」です。関心のもとには僕自身の関心が反映されているとは思いますが、大きいテーマなので、自分一人ですべてできるようなものではありません。分野の専門家、地域の専門家、いろんな人に協力してもらって進めていきたいです。学生さんも含めて。



田中二郎 撮影

ご自身の研究について

野口 なるほど、カメルーンは高田さんにとっては新しいフィールドだと思いますが、狩猟採集民と農牧民のコンタクトゾーンという観点からは、どういうふうに位置づけられるのでしょうか。

高田 そうですね、カメルーンはひとつ前の景観のプロジェクトから入っています。サンとピグミー (Pygmy)

の人たちは昔からよく狩猟採集民研究で取り上げられていて、比較研究もあるので、いろんなことがいわれてきました。その中でも僕の関心に照らして重要なこととして、まず半乾燥地と熱帯域っていう環境の違いを反映して、授乳のパターンが全く異なるということがあげられます。また、熱帯林でみられる共同育児と、サン社会でいわれてきた母子間の密着もかなり異なる特徴です。どちらも狩猟採集民の特徴として隣接分野や一般社会から注目されてきましたが、それぞれの比較から違いが生じてくる仕組みを明らかにすることはすごく意味のあることかなあと思って、カメルーンも重要な調査地に位置づけています。

杉山 ちょっと戻るんですけど、この、基盤Sのテーマの背景を教えてください。高田さんの中での、道探索の話と子育ての話って、私の中では違う研究っていう感じで見てきたんですけど、高田さんの中ではその2つはすごくつながってたんやなっていうのが、なるほどって思いました。

高田 エスニシティの研究もね。なんか3つのテーマみたいな感じで言ってはきてたけど、実は根っここのところから遡るとつながってるんですよ。

杉山 環境によって人がつくられ、人によって環境がつくられ、みたいなものがこれまでボツワナとナミビアでいろんな経験をされてきたからこそ、気づけたことだと思います。その感じをカメルーンでもなんか同じことありそうだな、とそういった意味での手ごたえみたいなものは実際行ってみてどうでしたか。

高田 うーん。カメルーンはやっぱり大きく違いますね。ボツワナ、ナミビアはおなじサンでもあるし、ナミビアの方がもう少し、緯度が高くて農業が盛んな地域っていう違いはありますが、エコロジカルな環境も似てるので、基本的には共通点がよく目につきます。例えば、僕が注目しているジムナスティックや子どもへの言語的なはたらきかけは、クン(!Xun)とグイ(Glui)、ガナ(Glana)で言語は違っても結構似た側面が確認できます。そういう意味では、サンっていう一つの大きなまとまりと、農牧民もバンツー系(Bantu)っていう意味では繋がってる面もなくはないので、ボツワナとナミビアは類似するところが多いですかね。もちろん、そこから始めて国の成り立ちが違うとか、王国があったかどうかとか、そこの違い、ボツワナとナミビアの違いっていうのが面白くはなってはくるんですけどね。ただ、カメルーンと南部アフリカを比較すると、さっ

き言った共同養育みたいなのはやっぱり熱帯域の特徴で、乾燥地では母親がエクスクルーシブに授乳するなど、大きな違いがあります。もう一つは、ディシプリンにとっての重要性に対する手ごたえもあります。子どもの研究はインタラクションの研究から始まってますが、基本的には人と人のかかわりを見てきた歴史が長いんですよね。そうすると、人の外にある、よく「リソース」って言われるような、何を使ってインタラクションをやっているのかとか、場面そのもののセッティング、みたいなものが、どうしても背景になってしまって議論に統合されてないことが理論的に大きな問題といわれています。だからもっと理論の核心にも環境と人の相互作用っていうものをもってくるっていうのが今求められてると思います。そういう意味でも、このテーマは大事なかなと思ってますね。



高田 明 撮影

様々な調査地やテーマをフィールドとするプロジェクトのメンバーについて

杉山 私もニューカデとオカバンゴの二か所で調査をして、比較するのって難しいよねっていう話を高田さんとしたことがあると思います。私自身も違うところで調査地をもつ難しさっていうのを感じてきたん

ですけど、カメルーンっていう新しい調査地をもつことによって、比較ではなくってカメルーンが入ることによる、理論的な面での再構築を目標にされてるんじゃないか。

高田 比較が難しいのは確かです。比較にはいくつもの種類があると思うんですよ。全面的に A,B,C の構造を比較するっていうのは、これまゝ絵にかいた餅になりやすくって、全体を見渡せるようになってからじゃないとできないので、そう簡単ではありません。でも、ボツワナとナミビアだったらベースになってるところの共通性がわりとあります。サンのいくつかのグループのように、要素だけが似てるんじゃなくて、Genealogical (系譜的) にも共通のプロトタイプみたいなものを想定しうような関係にあるようなものだと意味ある比較がしやすいと思うんですよ。一方、サンとバカミたいに大きく違うグループだと、言語学でいうところのタイポロジー (類型論) 的な比較、例えば系譜的には関係がなさそうだけど SVO 構造をもっているような言語間でその構造が他の言語の要素とどのように関わっているか比較するような研究を行うこともあります。またある程度自立した活動、たとえば授乳時に限って、誰がどうかかわっているかっていうのを 3つのグループ

で比較してみるみたいな場合だと意味のある比較ができると思います。ですからそのテーマに応じて、どこをどう比較するかっていうのを考えてるっていうのが現状ですね。あとこれも僕一人ではとてもカバーできないので、関連する研究をやってる人と一緒にやることで、自分が及ばないところを補ってるっていう感じかな。

杉山 ちょっと質問飛んじゃうかもしれないんですけど、高田さんの研究の中でのカメルーンが入ってきての意味っていうのはよくわかったんですけど、他の研究者に対する、「こういう風に発展していけばいいな」とか、そういったものはないですかね。

高田 学生さんも研究員も分担者も、コラボレーションをしている研究者仲間ではあるんですけど、全面的にこのプロジェクトに属してるわけではないと思っています。だから、各人にそれぞれの関心があって、プロジェクトとしての関心があって、それがオーバーラップする部分、響き合うところで共同研究の活動が進めばいいなと思っています。ちょっと抽象的ですけど、みんなの力を全部一つの方向に向けて統合しよう、みたいなイメージは僕はもっていません。むしろ、みんなの持ってるベクトルを足したときに一応前に向かえばいいな (笑) という感じですね、ちょっとぐら



現地調査の様子 (杉山 由里子撮影)

れていても同じ向きの矢印を足したら前には進むでしょう？2つの矢印が反対を向いていると力が打ち消しあっちゃうんだけど、それでも後ろ向きに進むのでなければいいかなと思っています。論文それぞれによってベクトルがあるから、結局どういう最終的な生産物になるかっていうのは、僕も完成形がはっきりわかっているわけでは



野口 朋恵 撮影

ありません。僕はよくプロジェクトとプログラムを言い分けているんですけど、予定調和的にプログラムされているんじゃないくて、あくまでも未来に向けたプロジェクトなんで、予想できない部分も結構あって、だから面白い。その結果として生まれてきたベクトルでユニークなフィールドが拓けたらいいなあって思ってます。

研究やフィールドにおけるエピソード

野口 さっきの子育ての研究のところにも少し近いかなとは思いますが、実際に高田さんもご家族があって、子育てをしながらフィールドに行かれていますよね。子育てをするようになって、フィールドの見方が変わったとか、どういった変化があるか、ということも聞きたいなと思います。

高田 もう、うちの子14歳になったから(笑)、僕の研究対象の0歳から5歳からはだいぶ時間が開いていますが、うちの子らが小さいときは一緒にボツワナのそれこそニューカデ(New Xade)にも連れて行ったりしました。変化というと、まず違うのは向こうの人の受け入れ方が変わるってことですよね。僕一人でいるときと、奥さんと一緒に2人で行くときと、あと子どもも一緒に行くとき、それぞれやっぱり向こうの人の受け入れ方が違って、かかわり方とか話す内容とかも変わって、「あっ(そういうことか)」って気づ

く。学生さんがいたり、共同研究者がいたりしても違う視点に気づかされることはあるんですけど、自分自身の立場が変わることでも、こんなに見え方が変わるんやーって実感するのは面白い経験でしたね。うちの子どもも変わるしね。グイ、とかガナの子らに朝連れてかれて、そのまま夕方まで帰って来なくて(笑)

ご自身の研究人生における本プロジェクトの位置付け

野口 基盤Sの意気込みを。

高田 意気込みかぁ。大きなプロジェクトだからすごいということはないと思うんですけど、プロジェクトが大きいということに関わる人の数と動くお金が大きいついていうことではあるので、そういう意味で現地の人や組織との関わりも含めてプロジェクトをやってる期間にいろんなことが起こると思うんですよ。そこで見えてくるものっていうのは、これまでよりももちろん横には幅広くなるだろうし、願わくば深くも広がってほしいですね。小さいプロジェクトよりも自分が予想していなかったことがいっぱい起こるから、それが楽しめるくらいの余裕を持ればいいなと思ってます、っていうのが意気込みです。

杉山 具体的な成果としては？

高田 成果としては3地域でアクションリサーチを試みるので、さっき言った比較っていうのが上位の目

標だと思うんですけど、まずはそれぞれの3地域でまとめたモノグラフみたいなものが制作できればいいなあと思います。もちろん個別の論文などはそれぞれの研究者が自分たちの関心とプロジェクトの関心を照らして書いていってくれるとは思いますが、それをまとめる役っていうのが僕には期待されてると思うので、それをまとめるモノグラフみたいなものものが3つはできたらいいなと思ってます。

野口 今計画されているアクションリサーチの具体的な内容について教えてください。

高田 アクションリサーチでは相手があるので、他の研究以上に予想通りに進まないことは覚悟しています。今現在進んでいるのは、まずボツワナでは野口さんも知っているように、民話を新しい形でリバイタライズすることをねらった紙芝居のプロジェクトが一つ。それからナミビアでは、今度、一年生の渡邊さんが行ってさらに関わりが増えると思うんですけど、コミュニティミュージアムみたいなものをつくってアクティブに活動している知り合いがいて、その人がエコカとか、エコカに影響の大きかった宣教団の活動なんかを随分独自に調べてるので、そういう活動とプロジェクトが共鳴しあうようになったら面白そうだなあって思っています。

あと、カメルーンの場合は大型の SATREPS のプロジェクトも進めるように、京大のチームが現地の社会とか、生態学的な資源の利用にも深く関わってきました。その流れの中でこれまで比較的調査されてなかった子育ての側面から、環境との関わりを見直せたら面白そうだなあと思ってます。JICA も関わってるんで、実際にアクションリサーチとしてもカメルーンが一番、今進んでると思うんですけど、そこに絡んでいきたいですね。

杉山 環境とのかかわり合いを解明することによって、現地の人たちにとってはどういう還元のあり方があると考えますか。

高田 アクションリサーチを推進するので、今、例をあげた3つともそうなんですけど、研究をやっている瞬間にもいろんな活動・還元が進むような形が理想です。例えば紙芝居だったら実際に上映会をすることか、ミュージアムだったら展示をすることか、カメルーンだったら公開のシンポジウムをすることか、その過程で、例えば、どの程度お客さんと呼べるのか、それが仕事として成り立つのかなど検討していきたいですね。NGO なんか絡んだりすると、それは彼らにとっては仕事でもあるので、それによって上手くいくこともあればいけないこともあると思うんです。



杉山 由里子 撮影

けど、さっきの発想と一緒に、最終的にベクトルが前に向けばいいな、みたいな感じで考えています。

杉山 長らく問題になってきた狩猟採集社会と政府の関係についてはどう思われますか？例えば、(杉山さんが自分の研究を通じて注目している)埋葬の裁判だったら、なかなかその形、サンの人々にとって(ツワナで重要視されているお墓のような)形あるものが大切っていう主張がしにくいなと感じています。サンでは見えないものほど自然との関わり合いによって成り立っていて、そうした見えないものこそが彼らにとって大切だと私は思っています。しかし、研究者がそれを主張すると、サンでは形あるものがない、あるいは重視されていないと政府にとられてしまって、彼らの不利益になりかねません。だから、政府との関係において、研究者の立ち位置や発言ってすごく難しいなと思います。このプロジェクトで環境との関わり合いを解明していくことで、何かしら政府と狩猟採集民の関係性の改善にも貢献できるかなと思うんですが。

高田 そうですね。アクションリサーチにはもちろんリサーチの側面もあります。よく act of meaning (意味の振る舞い；言語学者 Michael Halliday や文化心理学者 Jerome Bruner の研究によって有名になったフレー

ズ) とかいうけど、皆さんご存知の通り、僕はそうした社会的な意味のやりとりみたいなものがどうやって始まってどうやって展開してみたいなことをずっと研究してきました。僕の中ではその基本的な考え方がずーっと軸になっています。だから、アクションリサーチといっても、例えば収入をいくら増やそうみたいな目的を前面においてるわけではなくって、彼らにとっての社会的な意味がどういうふうに出て上がってきて、どういうふうな使い方ができて、それが実生活の中でどういう未来に向けて展開の仕方があり得るのか、みたいなところに一番の関心がありますね。そういう意味のやりとりを通じて、現地の人と一緒にコラボレーションができればなあって思っています。その中には政府も重要なアクターとして入ってくるでしょうね。プロジェクトの中で Future making というフレーズを使っていますが、未来っていうのはいろんな人たちと組織が協力して作っていくものだと思います。そこに私たち一枚噛みつつ、さっき言った前向きなベクトルを持った未来が生まれてきたらいいなっていう感じです。(2023年7月27日実施)



インタビューのひとこま

高田 明 (たかだ あきら)

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

研究テーマ：行動の社会化、言語の身体化、制度の内面化

調査地域：カメルーン、ナミビア、カメルーン

インタビュアー

野口 朋恵 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 大学院生)

杉山 由里子 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員)

インタビュー 特集2

メンバー 山内 太郎

(2023年9月26日実施, インタビュアー: 田中文菜・杉山 由里子)

研究分担者で、高田教授との共同研究を長らくされてきた山内太郎さん（北海道大学大学院保健科学研究所・教授）にインタビューをおこないました。

人類生態学と保健科学などをベースとした大学院時代からの研究の経緯についてはテーマもフィールド也多岐にわたっています。ここでは、とくに当プロジェクトに関連する内容を抜粋しております。

田中 「子ども間の相互行為」が基盤Sのキーワードになっていますが、これまでの山内さんの研究と、どういったふうに関係していますか？

山内 子ども間の相互行為というと、やはり食べ物ですね。食べ物をどうやって分配するかというほど大げさではないかもしれませんが、それはニューギニアのようなサツマイモの文化圏とか、あるいは稲作の農耕社会でも違うわけですね。子どもたちを含む家族、世帯間ですね。世帯の中でどうやって両親が子どもに食事を与えてるかとか分配しているか。あと、狩猟採集民だったら世帯内での分配。ただ、私自身はあんまり食事調査で子どもを対象にしたことはなく、むしろ大人たちですね、中心になるのは、成人男性、

成人女性の統計的に仮想的な、1人の成人がどれくらいの栄養価あるか、足りてない栄養素がどうかみたいな細かい話をしてたので、子どもの話はあんまりなかったですね。むしろ成長ですかね、子どもを対象したのは、身長をいっぱい測って、年齢推定して。本当は、1人の子どもをずっと0歳から20歳まで1年に1回とか半年に1回ずっとずっと測定していくと綺麗な成長曲線ができるんですけども、それなかなか難しいので、まあ横断研究。1年にいっぺんとか2年にいっぺん行ってバアッと全員測って、（中略）混合したサンプルで、それでもいろいろ統計的に処理して、スムージングをおこなって綺麗な成長曲線を作って。そういう民族固有の成長曲線で滑らかな線を作ると、後から年齢と性別がわかれば、その子どもの成長が良いか悪いかみたいなのがすぐわかる。ただそれは昔の研究で、今は（テーマが）サニテーションになってからは、ザンビアの首都ルサカでおこなっている「子どもクラブ」を対象としたアクションリサーチ



ザンビア・ルサカでの「子どもクラブ」との活動に参加（2018年 林 耕次撮影）

かな。子どもクラブは、小学生と、あとは中学校を出たぐらいからの20歳を超えて25歳ぐらいまでのユース（若者）。何か地域のサニテーションに関わる活動をやろうっていうと、みんな面白そうだって来てくれて。その人たちを仲介にして小学生たちとも関わるようになりました。我々、外部の研究者が小学生を束ねるなんて難しいじゃないですか。学校の先生というやり方はあるけど、スクールベースじゃなくてコミュニティベースにしたかったの。なのでコミュニティの青年団であるユースグループとやって、何かその辺がすごいインタラクションがあると思います。ただ細かく子どもたちの相互のインタラクションとかはあんまり調べてはないですね。だから基盤Sでやってるみたいなのは残念ながらまだ見れていないです。でも、それはすごい面白いと思いますね。

田中 基盤Sのカメルーンのテーマ、「活動中の一時保育と多人数の養育」について教えていただいてもいいですか？

山内 それは大学院生との共同研究で、2022年にダブリンで開催されたCHAGS（国際狩猟採集民会議）でも発表したんですけども、バカの定住集落でのデータですね。だから森の中でもやってみたいと思うんですけども、もし誰かやる気があれば、高田さんも使ってた30秒のチェックリストがあるんですね。養育活動が項目ごとに分類されていて、facial expressionとか目配せと何かそういう顔の表情とか。そうしたカテゴリーがあって、あとタッチとかあって。その分類されてるやつに、1個だけ項目を加えました。それは何かというと、「目の届く範囲に置いておく」。それを育児児と言っているのか悪いのかっていうのは定義によると思うんですが。私たちは、それも一応育児児というふうに項目として加えて、30秒後チェックリストで具体的な育児時間を計測しました。それも男の子と女の子で、あとはさっき言った成長曲線の分析もしてあるので、思春期がわかってるんですよ。何歳からとか。もちろん個人差あるんですけど、大体男子は9歳ぐらいから、女子は10歳ぐらいからになります。さ



長年通い続けているカメルーン南東部のバカ集落で、子どもたちと記念撮影（2019年 林耕次撮影）

らに年齢層として二つに分けたんですね。Younger children と Elder children みたいに。だから四つのグループですよ。男女で年少/年長、その四つで、どのカテゴリーが平均的な、全部統計処理してますけれども、一番子育てに関与してるか。例えば Elder Girl が一番になってるとか、Older boy になっちゃうと、もう生業活動の方に行っちゃうんですね、お父さんとかと一緒に。なので子育てにあんまり関与してないとか、そういうことを調べたりしてました。

田中 基盤Sの代表者の高田さんとは、2016年から2021年に「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌」といったテーマで共同研究をされていますが、そこからどのように発展させて今の研究に繋がっているのですか？

山内 これまでは私の 調査方法のひとつは「個体追跡」ですね。子どもであっても大人であっても、ひたすら1人の対象者を朝から晩まで追跡して、活動を記録したりしたんですけど、やっぱり子育てを観察するのはなかなか難しくて。ずっと座ってお母さんと一緒

に座って何か見てればいいのかというわけでもなく、どうしようかなと思ったとき高田さんからチェックリストを教えてもらいました。それを使って、先ほど説明したような調査をやって、まず1日1人の乳幼児に何人の養育者が育児に関与してるかという調査を行いました。そこで、平均15.8(人)っていう数値が出たんですね。母親入れると16.8(人)。それが先行研究のエフェ(ピグミー)で11人、アカ(ピグミー)は20人。ちょうどその間に入ったんですね。なのでそんなに悪くない数字。5人の乳幼児に連続3日間で、12時間ぐらいとったのかな。ただ30秒だから、全部その観察機会で考えると1万6000いくつとか、すごいデータポイントになって、量的には十分統計解析できる。だけど、そもそも対象者がその5人しかいないとか、あと雨季と乾季とかそういう季節の違いいうのやってないし、あと場所も定住集落のみだったの、森のキャンプにいるときにやってないとか。ですから、かなり限られたある1点のデータみたいなものなんですけれども、一応、先行研究の他のピグミーの結果と大体そんなに外れてない間に入った値が出たというところですかね。それが高田さんとの共同研究でした。



ルサカ（ザンビア）の都市スラムの様子。散乱したごみの脇で、子どもが遊んでいる。(Sikopo Nyambe 撮影)



子どもクラブ「Dziko Langa」によるワークショップと展示会の様子。(Sikopo Nyambe 撮影)

田中 ザンビアのアクションリサーチについて、先ほど子供クラブおっしゃられていましたが、もう少し教えていただけますか？

山内 はい。なぜ子どもクラブを作ったかというと、ザンビアの都市スラムに限らず、特にアフリカな、サブサハラアフリカの都市スラムの「フライングトイレ」って聞いたことがありますか？「飛んでるトイレ」。

田中 …… ないですね。

山内 スラムだから、1軒1軒にトイレはなくて、公衆トイレがあるんですけど、結構ぶっ壊れて、トイレの役割を果たしてないんですね。むしろそこがゴミ捨て場になったり、謎の色の液体が流れていたり、注射針が落ちたりとかして、近寄りたくない公衆トイレなんです。そうすると、特に女性にとっては怖いじゃないですか。性暴力もあるし、あと害虫なんかもいるし。なので、割と家の中の安全なところで用を足すんですよ。牛乳パックみたいなとかビニール袋にね。それをちゃんと、昼間にトイレに持っていけばいいんだけど、そのまま外に投げ捨てるんですよ。それは「フライングトイレット」と言われていて、朝起きるとスラムの道にね、人間のし尿が落ちてたりするんですよ。そういうところを、ハイヒール履いたお姉さんとかお化粧した方とかが歩いていて、街のもっと綺麗なところにスラムから通勤するとかいう、何かすごいシュールな世界があるんです。スラムに住む大人たちは諦めてんですよ。お金もなくて地面を掘り返すような大規模な土木工事を伴う下水道はできないし。かといって先進国からトイレが来ても壊れて使えないし、諦めて

いる、そういう状況ですが、面白いことに水は買っているんですよ。スラムの人ですら飲み水はお金出して買うのに、排泄に関してはもう目の前から消えればいいっていうね。それがホモサピエンスの本質だと僕は思うんです、私も含めてね。ですが、子どもはもっとピュアだから、きつとこういう同じところで生活していて、大人たちの生活やし尿に対するものに関して、子どもなりに感受性があるって、なにか彼らなりに思うところあるんじゃないかなと思って「子どもクラブ」を組織してみました。そこでフォトボイスっていう手法のために中古のデジタルカメラとかを持って行って、あるいはスラムだけど首都だから、みんな昔の3Gぐらいの安いスマホみたいなものを持っているのでサンテーションの問題点について写真を撮ってもらったんですね。写真には必ずコメントつけてもらったんです。カメラとかを持ってない小学生の小さい子には絵を描いてもらったんですね。絵にコメント。それらを研究者側が少しプッシュした展示会で展示しました。ただ、企画自体は全部子どもクラブでやってもらって、そうしたら200人とか、結構多くの人に来てくれて、反響があったんですね。さっき言った諦めてる大人たちも、自分の子どもからこうやってトイレの悲惨な状況みたいなものを突きつけられるとちゃんと話を聞く。

このように、大人は自分の子どもの話は聞く。だけど大人は、外国人の研究者の話とか、同じ国のエリートの話は聞かないですよ。ね。「何言ってるんだ」「あんたたちはいいけれど」、みたいなね。「スラムはそんなもんじゃないぜっ」てね、みんな思ってるので。でも子どもたちからのボトムアップに、子どもから大人、大人から大人、大人から地域社会みたいなね、そういうすごいゆっくりした感じですけど、社会変革、ソー



ワークショップに参加した子どもクラブのメンバーの表彰式。(山内太郎提供)

シャルトランスフォーメーションというものを基盤として、子どもクラブをやっています。

今の課題は、プロジェクト終わってお金もないので、どうやって運営していくか。子どもクラブがちゃん世代交代をしていくために、日本の学校の部活みたいに先輩が後輩をちょっと教えるみたいな。やっぱり大きくなったら抜けていくじゃないですか。そういう仕組みを今作ってるんですね。要するに、自立的に子どもクラブが回るように。あと NGO 登録したんですね。NGO になったので、いろいろ資金を得るチャンスがあるんですよ。そういうのに応募するときに、申請書を書くじゃないですか。そういう書き方とかサポートして、またそれも研究者がいちいちやるんじゃないくて、上の方の賢い人たちをトレーニングして上から下に知識とかが伝わるような、回転していく仕組みを今作っています。

田中 基盤Sでも、カメルーンでアクションリサーチをしてみたいとお考えですか？

山内 やりたいですね。子どもクラブ作りたと思いますけど、できるんだろうかって感じですけど。ただバカ・ピグミーの人たちはね、結構したたかなので、農耕民がいたら従うふりするし、いなくなったら馬鹿にして笑うし、そういう感じなんです。そこら辺をどうするかですね。すごい柔軟に生きてる、いろんな環境の中で。ただ、子どもたちが何か面白いと思って、自発的にやりたいとなれば強いと思うんですよ。なのでローカル NGO とか、研究者がたまに1年にいっ

ぺん行くとかいうレベルじゃなくて、ずっと地元で活動してる人たちとうまく。ザンビアのユース、青年団じゃないですけど、ローカルな大人たちとどううまくコラボしてやるのが一つのアイディアかなと思ってます。

田中 山内さんの研究人生における基盤Sのプロジェクトの位置づけについて、意気込みやイメージしてる成果を教えてください。

山内 カメルーンだけでなくナミビアとボツワナも含まれていることで、狩猟採集民では私はバカしか知らないんです。ですから例えば、カラハリのサンの人たちとか、あるいはちょっとフィールドが違うけど、タンザニアのハッザとかね、そういった違う狩猟採集民の人たちも見てみたいなと思っています。実際、研究はそれぞれのチームの人がやるから、見るぐらいしかできないと思うんですけど、やっぱりそれでいろいろ視野が広がって、「バカの人たちはこういうユニークネスがあるね」という話ができると思っているので、すごい楽しみ。初めてですね、狩猟採集民で、他のフィールドにも関わられるっていうのが、30年ぐらいやってるんですけど、初めて、ようやく晩年になってチャンスをいただいたと思ってますので。そういったフィールド間でのコラボレーションとか企画っていうものをチャレンジしたいなと思っています。

(2023年9月26日実施)

山内 太郎 (やまうち たろう)
北海道大学保健科学研究院・教授
研究テーマ：行動の社会化
調査地域：カメルーン

インタビューー

田中 文菜 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員)
杉山 由里子 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員)

紙芝居づくりにみるアフリカ狩猟採集民の文化と世界

中山恵美 (京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科 高田研究室)

この基盤(S)では、アフリカ狩猟採集民の民話を紙芝居に作成し、現地で子どもたちに読み聞かせる「紙芝居プロジェクト」を、2023年1月より開始しました。紙芝居の素材となる民話の選定や、紙芝居の作成を徐々に進め、この度、第1作目となる『ツチブタ女の物語』(グイ(Glui)・ガナ(Glana)の民話)が出来上がりました。民話の内容は、ツチブタと結婚していた男の周辺で、ツチブタを捕まえて食べてしまおうとする騒ぎが起き、ツチブタが命からがら逃げるというものです。

紙芝居づくりは、まず物語の舞台となる現地の環境や生活文化を知るところから始まります。現地の人々はどのような見た目なのか、衣服はどのようなものか、

男女のしぐさの違いなど、狩猟採集民の生活文化に触れつつ紙芝居の一枚一枚作成していくのは、とても興味深い作業でした。紙芝居制作のあいだに、日本在住のグイ・ガナの人々に試作品をオンラインで見てもらい、意見交換もしました。現地の人々による指摘は興味深いものばかりで、例えば手を叩きながら歌を歌っている男性の絵を描くと、「普段、男性は手を叩かない」という返事がありました。そうしたグイ・ガナ独自の習慣を織り交ぜて、紙芝居も修正を重ねました。

紙芝居プロジェクト、そして現地で紙芝居を上演することは、私たち日本人とアフリカ狩猟採集民のそれぞれに、自らの常識と違った慣習・知らなかった世界観を見せてくれるのです。



図1. グイ・ガナの人々の意見を聞く前に作成した紙芝居。当初は、柄のついた布の服で、男性も身体全体を包むように着せていた。



図2. グイ・ガナの人々の意見を聞いて修正した紙芝居。男性は皆、上半身は裸。男女とも野生動物の皮製の服を着ている。グイ・ガナの人々は、この修正案に喜んで頂いた。

海外派遣報告 2023.4-8

杉山 由里子 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員)

派遣先: ドイツ / 派遣期間: 2023/5/29 - 6/10

ケルン大学グローバル・サウス研究センター (GSSC) にて 開催された「アフリカの未来 2023 (African Futures2023)」に参加。『家族の記憶とアフリカの未来』と題されたパネルにて「喚起的な繋がり：ボツワナにおける移住政策とサン」の発表をおこなった。



「アフリカの未来 2023」中に開催されたラウンドテーブルの様子

高田 明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: オーストラリア / 派遣期間: 2023/6/27 - 7/2

ブリスベンのクイーンズランド大学で開催された The International Conference on Conversation Analysis Analysis (ICCA2023) に参加し、パネル “Exploring Social Norms across Languages” にて発表をおこなった (Norms and practices that enrich storytelling among the G!ui G!ana of the Central Kalahari).



クイーンズランド大学のキャンパスにて

高田 明 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

派遣先: ベルギー / 派遣期間: 2023/7/8 - 12

ブリュッセル自由大学で開催された第 18 回国際語用論学会 (18th IPrA) に参加し、共同研究者の森田笑博士 (シンガポール国立大学) とともにパネル・ディスカッション Arts of Distancing in Talk-in-Interaction をオーガナイズ。以下の発表をおこなった。

- Introduction to “Arts of distancing in talk-in-interaction” (Akira Takada, and Emi Morita) - Pragmaticization (?) of the Japanese honorific suffix-haru as a resource to mark agentive “distance” (Emi Morita, and Akira Takada)



ブリュッセル自由大学のキャンパスにて

田中 文菜 (京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 大学院生)

派遣先: カメルーン / 派遣期間: 2023/2/11 - 7/25

東南部州 / 熱帯雨林地域で狩猟採集民バカの乳幼児の行動と養育者達のケアについて、フォーカルサンプリング法に基づく定量的なデータ取得を伴う調査をおこなった。



村でおもちゃのバイクを作って遊ぶバカの子どもたち

詳細: 派遣報告一覧



主な業績

論文

Burdelski, M. 2023. Interpersonal touch in guided walking: Socialization to be pedestrians in Japan. *Learning, Culture and Social Interaction*, 41. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.lcsi.2023.100732>

Naing, W., Harada, H., Fujii, S., Hmwe, C. S. S. 2023. A simplified material flow analysis employing local expert judgment and its impact on uncertainty. *Journal of Material Cycles and Waste Management*, 25, pp.2101-2112. DOI: 10.1007/s10163-023-01660-5

Sai, A., Konishi, T., Nishiyama, H., Yamazaki, M., Hao, M., Yamauchi, T. 2023. The Physical and Mental Health Status of the Homeless in a Cold Region of Japan: Alcohol Intake, Diet and Psychosocial Distress. *International Journal on Homelessness*, 3 (2), pp. 139-155. DOI: 10.5206/ijoh.2022.2.14682

Sato, K., Hamidah, U., Sai, A., Ikemi, M., Ushijima, K., Sintawardani, N., Yamauchi, T. 2023. The Impact of Water, Sanitation, Hygiene and Menstrual Education on Menstrual Hygiene Management Practices in an Urban Slum of Indonesia *Sanitation*, 7(2), pp. 25-42. DOI: 10.34416/sanitation.00007

高田 明. 2023. 音楽的社会化への相互行為の人類学的アプローチ. 『音楽教育学』52(2), pp.34-41.

書籍(単著, 編著)

高田 明. 2023. 相互理解と文化. 大内雅登・山本登志哉・渡辺忠温(編), 『自閉症を語り直す: 当事者・支援者・研究者の対話』. 東京: 新曜社, pp. 173-184.

その他 刊行物

高田 明, 森田 笑. 2023. 日本語・京都方言の敬語接尾辞「はる」の働きについて. 京都大学乳幼児発達研究グループ(編), 2022年度赤ちゃん研究員活動・成果報告書, 京都大学乳幼児発達研究グループ.

Widlok, T., Takada, A. 2023. Obituary: Alan Barnard (1949-2022). *Anthropology Today*, 39(3), pp. 26.

Takada, A. 2023. Comments on "Parents, Caregivers, and Peers: Patterns of Complementarity in the Social World of Children in Rural Madagascar", by Gabriel Scheidecker. *Current Anthropology*, 64(3). <https://doi.org/10.1086/725037>

山内太郎. 2023. 「講座サニテーション学(全5巻)」『日本トイレ研究所アニュアルレポート'22』, 特定非営利活動法人日本トイレ研究所, pp. 21-23.

基調講演・招待講演等

原田英典. 2023. し尿の始末とサニテーション: リスクと価値をどう扱うか. 「排泄の自然誌を編む」: 人類学・霊長類学・環境工学・国際保健学を跨いだクロストーク(サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」2022年採択課題公開セミナー, 信州大学, 2023年4月17日).



林 耕次. アフリカ熱帯地域における定住した狩猟採集民の生活とサニテーション. 2023. 「排泄の自然誌を編む」: 人類学・霊長類学・環境工学・国際保健学を跨いだクロストーク(サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」2022年採択課題公開セミナー, 信州大学, 2023年4月17日).

Takada, A. 2023. Norms and practices that enrich storytelling among the G|ui/G|ana. Paper presented at the Webinar Series of Kalahari Basin Area Network. Zoom webinar, 20th July 2023.

高田 明. 2023. コメント2: ボツワナ・ハンシー地区におけるグイ／ガナの長期継続調査. 公開シンポジウム「海外調査地開拓のすすめ」. ハイブリッド開催(Zoom および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所). 2023年7月22日.

高田 明. 2023. ナミビア国概要. 2023年度 JICA 教師海外研修・派遣前研修. NPD 貸会議室: 岡山駅前. 2023年6月24日.

山内太郎. 2023. 人類生態学フィールドワーク: ライフスタイルと健康を測る. 「排泄の自然誌を編む」: 人類学・霊長類学・環境工学・国際保健学を跨いだクロストーク(サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」2022年採択課題公開セミナー), 信州大学, 2023年4月17日.

山内太郎. 2023. Future EarthEarth(地球の未来)を共創する. WHO オフィサーと語る～地球の未来とSDGsSDGs～/北海道大学環境健康科学研究教育センター 北海道大学大学院保健科学研究院, 北海道大学医学部百年記念館, 2023年6月4日.

山内太郎. 2023. 子どもと地域で創る未来のサニテーション. 令和5年度北海道大学公開講座(全学企画)「社会変革の実現に向けた大学の役割: SDGs 研究最前線」/北海道大学(Online). 2023年6月22日.

山内太郎, 山極壽一. 2023. 地球1つで暮らしていくために「企業に期待すること」とは? SWITCH CHAT for actionsactions ～Z世代が企業に期待するサステナブルアクションとは?～/一般社団法人SWITCH, SHIBUYA QWS, 2023年7月17日.

主な業績

学会発表・学術報告等

Harada, H. 2023. Association of WASH conditions and drinking water contamination and a proposal for the participatory risk-based WASH planning project. 11th Zambia Water Forum and Exhibition (ZAWAFE) Lusaka, Zambia, 2023/6/12 -14.

Harada, H. 2023. Challenges to global WASH: potential drivers of sanitation demand Water, Sanitation, and Hygiene Development course. Environmental and Occupational Health Unit, Department of Preventive Medicine, School of Public Health, Addis Ababa University, (Online), 2023/6/21.

原田英典. 水・衛生の役割とリスクの可視化に基づくアプローチ. 国際保健とアフリカ地域研究, 2023 年度サマーセミナー, 日本助産学会若手活躍推進委員会 (東京), 2023/7/8.

橋彌和秀, 岸本励季. 2023. 希少性と近接性: 曖昧発話の解釈における相互作用. 日本赤ちゃん学会第 23 回学術集会, 千里ライフサイエンスセンター (大阪市), 2023 年 8 月 4 日 - 6 日.

林 耕次. 2023. バカ・ピグミーの子どもの衛生感覚: 水くみ・トイレ・調理の様子から. (フォーラム: 子どもをめぐるコミュニケーションと健康). 日本アフリカ学会第 60 回学術大会, 幕張国際研修センター. 2023 年 5 月 14 日.

Morita, E. and Takada, A. 2023. Pragmaticization of the Japanese honorific suffix-haru as a resource to mark agentive "distance". Paper presented at Panel "Arts of Distancing in Talk-in-Interaction", the 18th International Pragmatics Conference, Universite Libre de Bruxelles, Brussels, Belgium, 10th July, 2023.

Nyambe, S., Yamauchi, T. 2023. The Dziko Langa Training and Activity Manual: Leveraging positive community identity, civic participation, and self-worth for sustainable WASH. 11th Zambia Water Forum & Exhibition, Lusaka (Zambia), online, 12-14 June 2023.

Nyambe, S., Yamauchi, T. 2023. Community-based WASH (water, sanitation and hygiene): Using participatory action research to explore 'different ways of knowing'. Hokkaido University-University of Melbourne International Workshop "Indigenous Health: Exploring Perspectives, Well-being, and Community-based Approaches". Centennial Hall Hokkaido University, 29th June, 2023.

Nyambe, S., Yamauchi, T. 2023. Water, Sanitation and Hygiene (WASH) Participatory Action Research with Children & Youth in peri-urban Lusaka, Zambia. Sustainability Research and Innovation Congress 2023, Panama City (Panama), Online, 26-30 Jun 2023.

Sai, A., Yamauchi, T. 2023. Indigeneity: Hygiene attitude and a sense of belonging among hunter-gatherers in Cameroon. Hokkaido University-University of Melbourne International

Workshop "Indigenous Health: Exploring Perspectives, Well-being, and Community-based Approaches". Centennial Hall Hokkaido University, 29th June, 2023.

Sambo, J., Nyambe, S., Yamauchi, T. 2023. Adopting a holistic approach for Menstrual Health and Hygiene: Possible opportunities and challenges for WASH interventions in peri-urban Lusaka, Zambia. 11th Zambia Water Forum & Exhibition, Lusaka (Zambia), online, 12-14 June 2023.

Takada, A. 2023. 3rd colloquium of ecological future making of child rearing: Co-construction of Habitus and Habitat in Namibia, Combination of Zoom webinar and in-person seminar, Kyoto University, Kyoto, Japan, 28th July 2023. (Organizer).

Takada, A. 2023. 2nd colloquium of ecological future making of child rearing: The Magic Word? Oh, Please. The Interactional Functions of "Please" in Requests, Combination of Zoom webinar and in-person seminar, Kyoto University, Kyoto, Japan, 19th May 2023. (Organizer).

Takada, A. and Morita, E. 2023. "Arts of Distancing in Talk in Interaction". Panel organized at the 18th International Pragmatics Conference, Universite Libre de Bruxelles, Brussels, Belgium, 10th July, 2023. (Organizer).

Takada, A. 2023. Norms and practices that enrich storytelling among the G|ui /G||ana of the Central Kalahari. Paper presented at Panel "Exploring Social Norms across Languages", International Conference on Conversation Analysis 2023, Brisbane, Australia, 28th June, 2023.

高田 明. 2023. 少数派の感情の相互行為分析. 会員企画シンポジウム: 改めて自閉症を語り合う: 特性と個性の間. 日本教育心理学会第 65 回 (オンライン), 2023 年 8 月 10 日.

高田 明. 2023. フォーラム: 子どもをめぐるコミュニケーションと健康. 日本アフリカ学会第 60 回学術大会, 幕張国際研修センター. 2023 年 5 月 14 日. (オーガナイザー).

高田 明. 2023. 南部アフリカのサンにおけるジumnasティックへの 4 つのアプローチ. (フォーラム: 子どもをめぐるコミュニケーションと健康). 日本アフリカ学会第 60 回学術大会, 幕張国際研修センター. 2023 年 5 月 14 日.

Takagi, T. and Sawai, Y. 2023. Repair initiated by stuttering: Communication disorder or interactional commitment? Paper presented at International Conference on Conversation Analysis, University of Queensland, Australia. 30th June, 2023.

Yamauchi, T. 2023. Water, Sanitation and Hygiene (WASH) Co-design: Building resilient WASH solutions through transformative transdisciplinary collaborations. 11th Zambia Water Forum & Exhibition, Lusaka (Zambia), online, 12 -14 June 2023.

Yamauchi, T. 2023. Food Security and Nutrition: Nutritional

status, dietary intake and physical activity of rural villagers in contrasting ecological zones in Southern Zambia. Hokkaido University-University of Melbourne International Workshop "Indigenous Health: Exploring Perspectives, Well-being, and Community-based Approaches". Centennial Hall Hokkaido University, 29th June, 2023.

Yamauchi, T. 2023. Co-creation with local communities: An overview of Sanitation and Health in Indonesia, Japan and Zambia. Sustainability Research and Innovation Congress 2023 Panama City (Panama), Online, 26-30 June, 2023.

山内太郎. 2023. 狩猟採集民の子どもの活動：半定住集落と森。(フォーラム：子どもをめぐるコミュニケーションと健康). 日本アフリカ学会第 60 回学術大会, 幕張国際研修センター. 2023 年 5 月 14 日.

山内太郎. 2023. 出ユーラシア集団における WASH-Food-Body Nexus の統合. 科学研究費助成事業新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」B01 会議, 同志社女子大学 (京都市), 2023 年 5 月 26 日.

受賞

杉山由里子「日本生活学会研究論賞」

受賞論文「セントラル・カラハリ・ブッシュマンにおける社会再編と葬儀：生と死をめぐる変化への対応」『生活学論叢』40：1-14.

杉山由里子「第 15 回京都大学たちばな賞 優秀女性研究者奨励賞 (学生部門)」

京大広報誌『紅萌 44 号』(2023 年 9 月刊行)にて、杉山由里子研究員のインタビュー記事「誰もが抱く死と向き合う難しさ. ブッシュマンの歩みに未来の鍵を探る」が掲載されました (19 頁).



詳細：『紅萌44 号』PDF

関連イベント

CCI データセッション

第 110 回 2023 年 5 月 12 日

発表者：高田 明 (京都大学)

「グイ／ガナの異常出産に関するインタビューの会話分析」

第 111 回 2023 年 5 月 20 日

発表者：高田 明 (京都大学)

「グイ／ガナにおける出会いとリクエスト」

第 112 回 2023 年 5 月 21 日

「専門家向けセミナー」

- 横森大輔 (京都大学)

"English 'really' and Japanese 'honto' with falling intonation as responses to informings"

- 串田秀也 (大阪教育大学)

"Doctors' delivery of potentially disappointing diagnostic news and patients' responses"

- 川島理恵 (京都産業大学)

"Conversation analysis on prenatal generic counseling"

第 113 回 2023 年 6 月 9 日

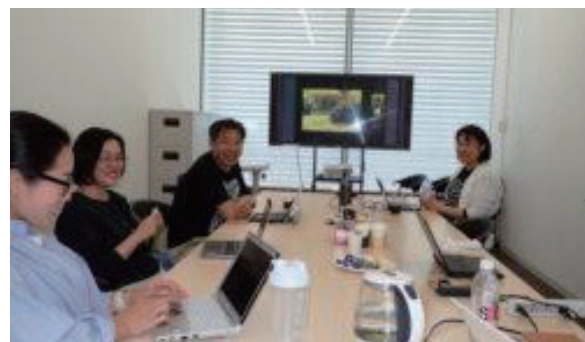
発表者：森田 笑 (シンガポール国立大学)

「子どもによる助動詞ハルの使用」

第 114 回 2023 年 10 月 6 日

発表者：高田 明 (京都大学)

「恥ずかしい」



第 110 回 (2023 年 5 月 12 日) の様子



第 114 回 (2023 年 10 月 6 日) の様子

子育ての生態学的未来構築コロキウム

第2回 2023年5月19日

対面（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）＋オンライン

講演者：Tanya Stivers (Professor of Sociology, UCLA)

“The Magic Word? Oh, Please. The Interactional Functions of “Please” in Requests”

第3回 2023年7月28日

対面（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）

Co-construction of Habitus and Habitat in Namibia

講演者 1: Velina Ninkova (Development Studies, Department of International Studies and Interpreting, Faculty of Education and International Studies, Oslo Metropolitan University)

““Education has made me lazy”: Reflections on the education challenges for the Omaheke Ju|’ hoansi, Namibia”

講演者 2: Simon Hangula Hangula (Ministry of Environment Forestry and Tourism, Namibia)

“The African ecological mechanisms of landscape formation: Application of remote sensing and GIS”



第3回 趣旨説明（高田）の様子



第3回 Velina さんの講演



第3回 Simon さんの講演

The 2nd Colloquium of Ecological future making of childrearing

【Date】

19th May 2023 (Friday) 16:45-19:00



【Venue】

#Large-sized meeting room, Inamori Memorial Foundation Building (third floor), Kyoto University

【Hosted by】

The JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (S)
“Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa” (Primary Investigator: Akira Takada)

The 3rd Colloquium of Ecological future making of childrearing

【Date】

28th July 2023 (Friday) 14:00-17:00



【Venue】

#Large-sized meeting room, Inamori Memorial Foundation Building (third floor), Kyoto University

【Hosted by】

The JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (S)
“Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa” (Primary Investigator: Akira Takada)

【Cohosted by】

113th KUASS

活動予告

京都大学アフリカ地域研究資料センター の公開講座を担当します

第1回 2023年10月7日(土) 15:00-17:00

講師：高田 明

「人類学から考える子育て：南部アフリカ クン・サン
の事例から」

第2回 2023年11月11日(土) 15:00-17:00

講師：杉山 由里子

「環境の変化の中で死と向き合う：南部アフリカ ブッ
シュマンの事例から」

第3回 2023年12月9日(土) 15:00-17:00

講師：林 耕次

「子どもの日常から探る衛生感覚：カメルーン熱帯
バカ・ピグミーの事例から」

第4回 2024年1月13日(土) 15:00-17:00

講師：安岡 宏和

「コンゴ盆地・カメルーンの熱帯雨林で野生動物マネ
ジメントを共創する」

第5回 2024年2月3日(土) 15:00-17:00

講師：原田 英典

「水・衛生と健康：ザンビア・ルサカの事例から」

☆ 会場：京都大学稲盛財団記念館 3階大会議室

子育て 第1回：2023年10月7日(土) 15~17時

人類学から考える子育て：南部アフリカ クン・サンの事例から

子どもの成長はその子が置かれた家庭や社会と深く結びついている。人類学は、子どもとそれをとりまく人々のやりとりが時代や地域によってさまざまなかたちをとることを示してきた。今回の発表では、南部アフリカのナミビア中部に住んでいるクン・サンを事例として、こうした可能性について、皆さんと一緒に考えてみたい。具体的には、クン・サンにおける授乳の様式、ジumnスティック（養育者が膝の上で乳児をジャンプさせる一連の行動）の分析について紹介する。

高田 明（たかだ あきら） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・教授。主な研究は、アフリカ狩猟採集民、特に『狩猟採集社会の子育て：クン・サンの子どもの社会化と養育行動』（京都大学学術出版会、2022年）、『Hunters among farmers: The !Kun of Etosha』(University of Namibia Press, 2022年)、『The ecology of playful childhood: The diversity and residence of caregiver-child interactions among the San of southern Africa』(Palgrave Macmillan, 2020年)等。

死 第2回：2023年11月11日(土) 15~17時

環境の変化の中で死と向き合う：南部アフリカ ブッシュマン（セントラル・カラハリ・サン）の事例から

大切な人の死—これは私たち誰もが少なからず経験することである。しかし、誰しもが心に抱えているその喪失は、日常の中で意識するような題材ではなく、個人的に向き合っていくべきものという掬めが、死を前にした私たちをますます孤立させてきた。ボツワナに生きる狩猟採集民ブッシュマン（セントラル・カラハリ・サン）は、ふとした瞬間に訪れる喪失の感情を、親戚や友人と共有し合う。そのような死との向き合い方が、社会変容と共にどのように変化してきたかを考えていく。

杉山 由里子（すぎやま ゆりこ） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員。地域研究、文化人類学を専攻。ボツワナの人口に占められ、ボツワナ大学東アフリカ言語文学部に入学卒業までして。2015年より現在とどき年ボツワナに滞在しており、主に心配りかけ続けている。そのようにして執筆した論文のひとつが『新しいディスタンス：ブガウェ・ブッシュマンの死と向き合いの物語』（『文化人類学』87巻2、2022年）。

京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座

関わる
育む 健康

2023 - 2024



● 開講日程
第1回 2023年10月7日(土) 高田明「人類学から考える子育て：南部アフリカクン・サンの事例から」
第2回 2023年11月11日(土) 杉山由里子「環境の変化の中で死と向き合う：南部アフリカブッシュマンの事例から」
第3回 2023年12月9日(土) 林耕次「子どもの日常から探る衛生感覚：カメルーン熱帯バカ・ピグミーの事例から」
第4回 2024年1月13日(土) 安岡宏和「コンゴ盆地・カメルーンの熱帯雨林で野生動物マネジメントを共創する」
第5回 2024年2月3日(土) 原田英典「水・衛生と健康：ザンビア・ルサカの事例から」

● 時間 15:00~17:00 (開場 14:30)

● 会場 京都大学稲盛財団記念館 3階大会議室 (第2回11月11日のみ中会議室)

● 受講料：無料

● 定員：80名 (先着順)

● お申し込み方法
・お名前(ふりがな)、Eメールアドレス/電話番号などの連絡先、受講希望講座を記して、下記のいずれかへお送りください。各講座の5日前までに申し込み下さい。
「京都大学アフリカ地域研究資料センター 公開講座係」
① E-mail: manabifrica@gmail.com
② 郵便: 〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
お申し込み頂きましたら、受講受付のご案内を返信いたします。

● 会場へのアクセス
・京阪「神宮丸太町駅」5番出口から北へ徒歩5分。
・JR/近鉄「京都駅」から市バス(205/174系統)で「蹴上」下車。東へ徒歩5分。
・その他、阪急「河原町駅」や地下鉄烏丸線「丸太町駅」からもバスが出ています。

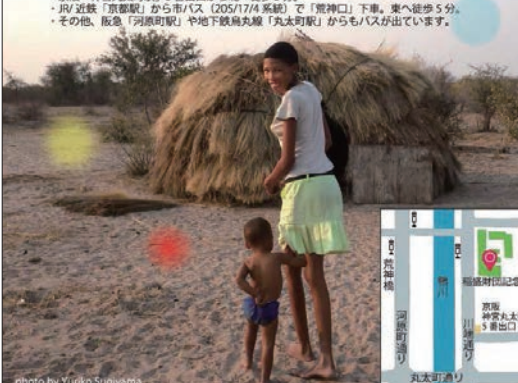


photo by Yukiko Sugiyama

詳細：リーフレット PDF



事務局より / 編集後記

事務局より

プロジェクト開始から一年が経過し、海外研究者の来日なども相次ぎました。関連する研究成果も徐々に出始めております。5月に開催されたアフリカ学会でのフォーラムについては、近々、学会誌『アフリカ研究』でも報告が掲載予定です。また、京都大学アフリカ地域研究資料センターの共催企画として、公開講座が10月より始まりました。あいにく対面のみで開催ですが、初回となる高田教授の講演では、参加者から多くの質疑がありました。今後のイベント等についても改めてお知らせいたします。

編集後記

Newsletterの第1号をお届けします。特集記事として、代表の高田教授と研究分担者の山内教授のインタビュー記事を紹介しております。いずれも完全版は、ホームページ上で掲載しております。ぜひ、ご一読くださいませ。合わせて、紙芝居プロジェクトの企画も着々と進行中です。こちらも続報をお待ちください。(KH)

表紙を語る



この写真(表紙)を撮った当時、私は大学院生の2年目で渡航も2回目。まだまだ分からないことばかりで、指導教員である高田さんの後ろをずっとついて回ることしかできませんでした。

現地の人々(グイ・ガナ)は、高田さん(中央右)が座っているこの椅子のことを、“高田の椅子”と呼んでいます。現地の人々は普段は椅子を使わず、砂の上にドカッと座ります。ただ、粒子が細かいことで有名なカラハリ砂漠であるこの地で砂の上に直接座ると、すぐフィールドノートが砂でザラつき、ペンの中に砂が入り込んでノック(かちかち)できなくなってしまいます。

私が日本に帰ってからこの写真(表紙)を見返し

たとき、すごく高田さんが“コシ”(ヘッドマン、政治的リーダー)っぽいなあと感じました。椅子に座るという行為は、長年に渡ってこの地を訪れ続けた高田さんだからできることなのだと気が付きました。



写真1

おそらく、みんながこの椅子を“高田の椅子”と呼ぶのには、大人や立派といった意味合いもあるのでしょう。私のフィールドノートはどれもザラザラで焚火のにおいがしますが、(写真1[2019年10月4日/ボツワナ・ニューカデにて]のように)これから砂の上に座ろうと思います。(杉山由里子)

本プロジェクト ウェブサイトのお知らせ

<https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/>





Newsletter no.1

November 2023

2023年11月10日発行

編集・発行：高田 明（研究代表）

E-mail: cci.takada.lab@gmail.com

